

氏名	松本 祐佳里		
学位の種類	博士(看護学)		
報告番号	甲第 113 号		
学位記番号	看博第 49 号		
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 19 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	小児がんの子どもへの看護師による トraumainフォームドケア Trauma-informed care by nurses for children with cancer		
論文審査委員	主査 教授	中野 綾美	(高知県立大学)
	副査 教授	畦地 博子	(高知県立大学)
		教授 池添 志乃	(高知県立大学)
		教授 田井 雅子	(高知県立大学)

論文内容の要旨

[研究目的]小児がんの子どもに対して看護師がどのようなトラウマインフォームドケアを行っているのかを明らかにすることを目的とした。

[研究方法]本研究は Patient Centred Care を理論的基盤とした、質的記述的研究である。研究協力者は、小児がん看護に携わった経験が 3 年以上ある看護師および学童期・思春期に小児がんを経験し、現在も小児科外来に通院中の者とした。データ収集は、半構成インタビューガイドを用いて面接を行った(2021 年 5 月～2022 年 8 月)。質的・記述的にデータ分析を行い、看護師と小児がん経験者の認識を比較して探究した。本研究は、高知県立大学研究倫理審査委員会と協力施設の承認を得て実施した。

[結果]研究協力者は、看護師 7 名、小児がん経験者 10 名であった。小児がんの子どもはトラウマ体験を【経験したことがない身体の変化に恐怖を覚える】【急展開する事態に何が起きているかつかめない脅威にさらされる】【治療による苦痛や恐怖により普段の生活が脅かされる】【常につきまとう病気や死への不安を抱え込む】【当たり前であった日常が消えていく状況にどうすることもできない】と捉えていた。看護師は、子どものトラウマ体験を【小児がんによって体験したことがない苦痛にさらされる】【治療により疎ましい状況に置かれる】【入院中に生じる孤独感と毎日面会に来てくれる母親への申し訳なさに対しジレンマを抱える】【入院前の自分らしい生活を取り戻すことができるか困惑する】と捉えていた。

看護師によるトラウマインフォームドケアとして、《信頼関係を築き安心して生きる基盤をつくるケア》《子どものからだ・心・生活に働きかけトラウマを予防するケア》《子どもがトラウマを乗り越えることができるように後押しするケア》の 3 つのケアの様相と 14 のカテゴリーが抽出された。一方、子どもは、【医師や家族からの子どもの心情を予測した病気・治療の説明】【治療や処置を乗り越えられるような後押し】【治療の辛さを払拭させる家族や専門職との時間】【病気を持ちながら過ごす学校生活に向けた配慮】【闘病体験の

認め合いや課題に取り組む機会】を受けていると捉えていた。さらに、これらのケアにより、看護師は【治療や処置による苦痛を乗り越える】【治療に主体的に取り組もうとする】【母親や医療者との関係の中で気持ちが前向きになる】【脱毛している自分と向き合い友人に開示する方法を良き相談者とともに探る】【脱毛していても自信をもって友人と向き合うことができる】効果をもたらすと捉えていた。子どもは、【自分なりの工夫や友人との交流から力してもらい辛い治療に順応する】【学校生活を必死に取り戻そうとする】【小児がんや治療に屈せず対峙する】【小児がんの闘病経験に価値を見出す】ようになったと捉えていた。

【考察】本研究の結果から、小児がんの子どもへの看護師によるトラウマインフォームドケアは、信頼関係を築き安心して治療に臨めるような基盤をつくり、子どものからだ・心・生活に働きかけ、治療や処置で生じるトラウマを予防することや、子どもがトラウマを乗り越えることができるように後押しすることであるといえる。小児がんの子どもへのトラウマインフォームドケアとして、予防に焦点を当てた《子どものからだ・心・生活に働きかけトラウマを予防するケア》が抽出されたことは、新たな視点である。効果の特徴として①内服に関連するトラウマ体験からの再トラウマの予防、②ボディイメージの変化によって自信を喪失する体験からの回復があると考えられる。

【結論】本研究結果を踏まえ、小児がんの子どもへのトラウマインフォームドケア指針を開発することが課題である。

審査結果の要旨

本研究は、小児看護専門看護師として、常に子どもの声に耳を傾けながら、看護師の小児看護実践力を高める高度実践看護を探究してきた松本氏が、小児がんの子どもへのトラウマインフォームドケアを実践していくためには、子どもの身近にいる看護師がトラウマになりうる出来事を認識し、トラウマを予防することが重要であるという問題意識に根差したものである。本研究の独創的な点は、小児がんの子どもが認識しているトラウマと看護師が認識しているトラウマを比較するとともに、看護師によるトラウマインフォームドケアについて看護師と子どもの認識とを比較することにより、トラウマインフォームドケアを質的に解明することに挑戦した点である。

松本氏は、小児がんの治療過程で生じる看護師が認識していないトラウマ体験を明らかにすることや、トラウマインフォームドケアを探究することは、子どもの医療トラウマを予防し、子どもと家族が安心して闘病生活を送る上で肝心であると考えている。

看護師7名と小児がん経験者10名に、1～2回/名のインタビューを行い、豊かなデータに基づいて、看護師のデータ分析と子どものデータ分析を丁寧に行い、さらに両者の分析結果の比較により、トラウマ体験、トラウマインフォームドケア、トラウマインフォームドケアがもたらすものについて探究している。《信頼関係を築き安心して生きる基盤をつくるケア》《子どものからだ・心・生活に働きかけトラウマを予防するケア》《子どもがトラウマを乗り越えることができるように後押しするケア》の3つのケアの様相と14のカテゴリー

が抽出されている。特に《子どものからだ・心・生活に働きかけトラウマを予防するケア》が抽出されたこと、効果の特徴として①内服に関連するトラウマ体験からの再トラウマの予防、②ボディイメージの変化によって自信を喪失する体験からの回復が確認できたことは、新たな知見であると言える。

本研究の結果から、小児がんの子どもへの看護師によるトラウマインフォームドケアは、信頼関係を築き安心して治療に臨めるような基盤をつくり、子どものからだ・心・生活に働きかけ、治療や処置で生じるトラウマを予防することや、子どもがトラウマを乗り越えることができるように後押しすることであると結論付けている。

本研究の成果は、松本氏の、小児看護専門看護師として小児がんと共に生きる子どもと家族の体験を共感的に捉え理解する力、子どもと看護師との間で生じる認識のずれを捉え考察する力および研究に向かう真摯な姿勢、探究心、丁寧な分析によるものである。

以上のことから、本審査委員会は、博士論文審査基準に基づき提出論文を審査した結果、本論文は、研究への着眼点、研究への着実な取組、研究成果の独創性、論理的な論証、研究成果の有用性と実践への適応可能性から、小児看護学の発展へ寄与する学術的価値があり、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。今後、松本氏には小児がんの子どもとのトラウマインフォームドケアの研究を積み重ね、対象を小児がん以外の病気と共に生きる子どもと家族に広げ、医療トラウマを予防しケアするトラウマインフォームドケアを開発していくことを期待している。